題　名　屠所の羊　下　赤い花
作　者　ドーナツ
発行日　2015 年 1 月 23 日発行
連絡先　twitter：@donut_no_ana
tumblr：http://donut-st.tumblr.com/
※ horirium 様（@horirium）の考案された折本デザイン、楠木暖様（@kusunokidan）の作成図を使用しています。

屠所の羊　下

赤い花

ヨシュアは頭の横で指を回し、尻を叩いて見せた。だが、獣は言葉にもゼスチャーにも反応しない。おそらく定例に沿った行動しか許されていないのだろう。

「バカ犬！」

軽侮という行為を理解しているかどうかさえ怪しかった。

「ぼくを見ろ！　よくもこんな目に遭わせたな！」

獣は、ただヨシュアの動きを目で追っている。ヨシュアは足元の石を拾い、獣に投げた。斜め前方に回避した獣は唸り声をあげる。瞬間、獣の体は横ざまに弾き飛ばされた。強い体毛に覆われた巨大な腕が現れる。鋭い爪から血が滴っていた。小山のような体を後ろ足二本で支え、耳をつんざく咆哮を放つ。目は一点、ヨシュアを見つめていた。

ヨシュアは動くこともできず、力の権化と対峙する。その間にも獣が、背中から腹にかけて傷を負いながら立ち上がろうとしていた。しかし、裂けた皮膚から肉が覗き、血液が絶えず流れている。果たせず、頭だけをもたげた。遠吠えを始める。

「……怪物？」

突進してくる怪物に黒いものがぶつかっては弾かれていた。『犬』たちである。さきほどの遠吠えは、獣が仲間を

招集するための行動だったのだ。

怪物は、獣よりもさらに大きい。個体としての力の差は歴然だ。資質の違いについては百も承知なのだろう。『犬』たちが行っているのは集団を生かした持久戦である。常に攻え、動作が鈍り始められては、急所を狙った攻撃が可能となる。

かりだ。　再び咆哮をあげ、怪物は爪を突き出す。

屠所の羊　赤い花

『森には、恐ろしい怪物がいるんだ。ぼくたちを食べちゃうんだよ』

怪物の目的は明らかだ。ヨシュアを捕獲したいのである。ヨシュアが、この場を去れば、戦闘は沈静化するはずだった。だが、ヨシュアは、この事情にまったく斟酌しない。彼は、『犬』たちが怪物にまったくばかりを見計らい、村の境界線を踏み越えた。

怪物の光で獣が浮かび、血を流している。不運な一匹は地に伏し、腹の裂けた獣が内臓が冷え切った空気の中で湯気を立てていた。

ヨシュアは、驟雨よりも花を続けざまに近づく樹木に近づ

中に持ち込まないでください」

「うん。迷惑かけてごめん」

ヨシュアは、脱いだ衣服をエリに渡した。簡は、ヨシュアの背丈ほどの高さに せり上がっている。カレブの膝にヨシュアがエリ立つと同時に観客からどっと降し始めた。

屠所の羊　赤い花

「ではよろし」

ヨシュアは手を振る。大地に完全に接した筒の中で ヨシュアとカレブの姿は崩れ、白い細かな塵となった。輝き なから天へと昇っていく。

（おわり）